

高校生の進路選択に関わる要因分析

(研究紀要No.26)

鈴木 規夫・椎名久美子・石塚 智一・柳井 晴夫

本研究は、組織的要因(高校タイプ、学科、設置、進路指導体制)及び個人的要因(学年、性、学内成績、経済状況)及び「学歴志向」「学習努力」「進路展望」の3つの代表的な進路意識と希望する進路との間の関係について分析したものである。

全国の高等学校381校の1, 2, 3年生を対象にして平成7年7月に調査を実施した。その結果14,318人(1年生4,823人, 2年生4,717人, 3年生4,778人)から回答を得た。学科別には普通科が332校, 職業科が49校, 設置別では公立が274校, 私立が107校であった。

進路選択のプロセスは、大きく2つの段階に別けて考えることができる。第1段階は、大学等への進学か就職かの二者択一の決定の段階である。第2段階は、選択した進路に対してどのような学部あるいは職業を選択するかの段階である。分析では、両段階で組織的要因と個人的要因が各進路選択段階でどのような影響を与えるかを調べた。その結果、第1段階での決定にお

いては、組織的な要因として進学校か非進学校、あるいは普通科か職業科の所属の違いが、また個人的要因としては成績と親の期待の違いが大きく影響していることが確認できた。この結果は多くの先行研究で知られているところである。

しかし、第2段階における学部選択においては、所属する学校の組織的要因の影響は小さく、個人的要因のうち学内成績や、学歴志向、進路展望に關わる進路意識の持ち方等の他モラトリウム動機が強く影響を与えていることが確認できた。そしてこれらの要因によって、学部の特徴を記述することができた。

例えば、典型的な例として経済系を志望する者の特徴をみると、学歴志向は高く文系学力も高いが、進路展望は低くモラトリウム動機が高い。また医歯薬系を志望する者は、理系学力や進路展望が高く、逆にモラトリウム動機は非常に低くなっている。図1は11の学部系統をまとめて、3つのクラス

ターに分類して表したものである。

一方、上で示した特徴は大学へ進学するか専修学校へ進学するかによっても違いが見られる。専修学校へ進学を希望する集団は、総じて学歴志向や学力は低い、進路展望は高く、将来に対する方向付けが堅実であるのに対し、大学へ進学を希望している集団は、その逆の様相を示している。進学校が多くの著名な大学への進学者を輩出していることは事実ではあるが、具体的な学部の選択段階では、そのような進学校か非進学校か等の組織的な要因の影響は小さく、個人的な要因の重要性を示唆するものである。

進路意識の分析の中で、学歴志向のもつ意味について調べてきた。ここでは、学歴の効用としての社会的地位の

確保、安定した職業の確保の2つの側面から捉えた。この点に関しては、大学進学希望者にはもちろん高い学歴志向の傾向が見られたが、その高さは志望する学部によっても大きな差異があった。法経済系、文学系、理工系、医歯薬系は総じて高い学歴志向をもっているが、教員養成系を含むその他の学部系では、それほど高い学歴志向をもっているわけではない。この学歴志向の高い学部系のうち、医歯薬系を除く学部系は、学力のみによって進路を決定している傾向が見られた。いずれも将来の進路展望に対する意識は低く、大学へ入学してから将来について考えるという構造が見えてくる。特に理工系でその傾向が強い。この特徴は1960年代の理工系ブームでは見られな

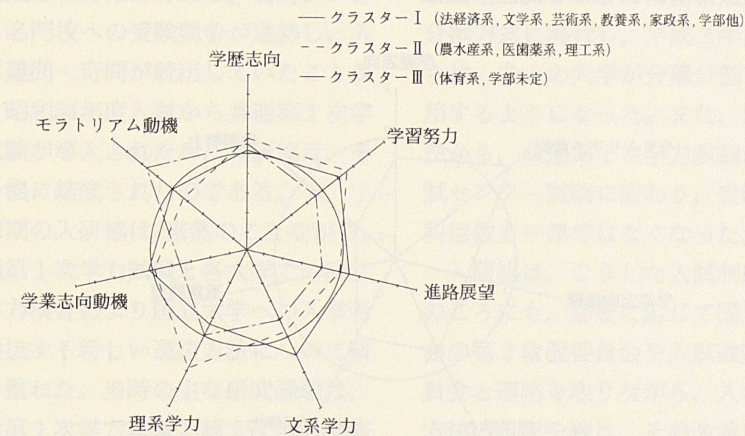


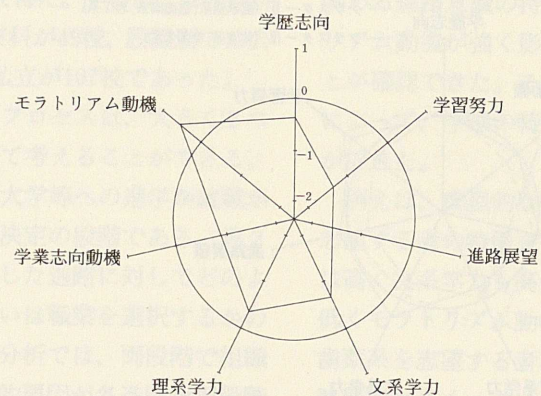
図1 志望学部に関する各クラスターのプロフィール
(大学・短大進学希望者)

かったものである。将来どのような方面へ進むかの意識が不明瞭である。ただし、先は見えないとしても、法経済系・文学系⇒事務・公務員，理工系⇒技術・技能といった流れは志望としての主流とはなっている。

成績だけでなく、個々の興味・関心や適性などの特性を大切にすることがある。しかし、個人のもつ特性が成績と関わりがないかという点、こと進路に関してはそのように切り離して考えるわけにはいかない。進路意識が未成熟な者に関する分析を通して、多くの者が成績の低い者であり、また学習努力への意欲が低い状態にあった（図2）。学校教育を通して、生徒は努力の大切さを学ぶが、その努力は、将来の目標への到達と密接に関わってくるものである。もし、目標への到達が困難

であるとするならば、あるいは目標自体が不明の場合には、必然的に努力の効用はなくなり、そこへの価値を見出せなくなる。その結果は成績にも反映するだろうし、逆に成績が低いことから努力しなくなるといった相乗効果が現れることになる。進路意識未成熟者は、まさにそのような目標喪失の状況に置かれていると言ってよい。このような進路未成熟者は、全体の約4%にあたる480人程度が該当する。1クラス当たり平均1～2人である。職業科で、また男子に多い。

生徒数の減少が続き、高等学校あるいは大学の対応が迫られている。生徒をとりまく環境の変化に応じて生徒がどのような行動をとるか、間隔をおいてあらためて調査を実施したいと考えている。



*「学業志向動機」「モラトリウム動機」は大学等進学希望者のみ

図2 進路意識未成熟者の進路意識のプロフィール